『鹿母経』真偽考

辛　嶋　雲　青

はじめに

後漢代から北宋代に至る九百年間に翻訳され、今日まで残っている漢訳仏典は、1482 部、総計 5702 巻、4600 万字に上る。漢語、とくに口語の様相を知る上で、漢訳仏典は非常に価値のある資料である。電子資料が完成していること、各種版本・写本が大量に伝来されていること、他言語文献との比較が可能なことなど、言語研究に有利な点が多い。漢訳仏典のもう一つの特徴は、多くの場合、訳者と訳出年代が明記され、いつまたどこで翻訳されたが、はっきりしていることである。しかし、これには問題点もある。唐代からはじまり、『大正大蔵経』（東京 1924-1934 年）、『中華大蔵経』（北京 1984-96 年）に至る歴代の大蔵経に記載されている漢訳経典の訳者名は、「経録」と呼ばれる経典目録に基づいている。現存する最古の経録、僧祐『出三蔵記集』（510-518 年）は、後漢代から六世紀初頭までの漢訳仏典の序文や後記を集め、訳者の伝記を収録したものであり、それ以前の古い経録を踏まえていて、比較的に信用がおける。しかし、その時代までのすべての経典を網羅しているわけではない。続く費長房『歴代三宝紀』（597/598 年）は、後漢代から六世紀初頭までの漢訳仏典を網羅した総合目録であり、その後の諸経録と大蔵経の記載は、基本的にこの『歴代三宝紀』に基づいている。ところが『歴代三宝紀』には、費長房の憶測と独断に基づく記載が多く、信用がおけない。例えば、『出三蔵記集』では、後漢の安世高訳経典として 34 部が記載されている。しかし費長房が古い訳者不明経典の多くを安世高訳とした結果、『歴代三宝紀』では 176 部もの経典が安世高訳とされ、今日の大蔵経までそれを踏襲している。もう一つ例をあげよう。大蔵経などで、三世紀前半の支謙訳とされている『撰集百縁経』には、他の文献では六世紀以降になって初めて現れる語彙・語法がすでに見られ、それらの初出として辞書・研究書に引かれる。また、多くの漢語史研究者がこの " 支謙 " 訳の研究を発表している。しかし、日本の仏教学研究者たちは、この漢訳が、六世紀末までの文献に言及されていないこと、『賢愚経』（五世紀半ば）を踏まえていることなどから、五世紀後半から六世紀の訳出経典と判定した。(1)

このように、大蔵経に記されている訳者名が、『出三蔵記集』に見えず、『歴代三宝紀』以降の目録に基づいている場合、その真偽を確かめる必要がある。しかし、その真偽を確かめるのは、

容易ではない。時代毎、あるいは訳者毎の語彙･語法表ができたなら、それらを判断基準にして、CT スキャンのように、疑わしい経典を鑑別できるかも知れないが、まだそのようなものはできていない。まずは一つ一つの経典の真偽を確かめるしかないのである。この論文は、比較的短い漢訳仏典を例にとり、訳者の真偽を確かめる方法論を示そうとするものである。

『大正新修大蔵経』（以下『大正蔵』と略す）には、長短二部の『鹿母経』という漢訳仏典が収録されている。短篇『鹿母経』（以下『鹿母経』［短］と略す）（T. 3, no. 182, 454a4-455a13）は 1186 字、長篇『鹿母経』（以下『鹿母経』［長］と略す）（T. 3, no.182, 455a19-457c12）は 3030 字からなる。これら二部の内容は概ね同じであり、いずれも訳者は竺法護（265-308 年に翻訳に従事）となっている。また、宝唱『経律異相』（516 年）にも「鹿第七・鹿母落搔乞與子別還來就死一」という題目でこの経が採録されている（T. 53, no. 2121, 249c29-250c24）。1028 字と三本の中で最も短く、内容は『鹿母経』［短］と同じだが、最後に「出『鹿子経』」と記載されている。

大正蔵の『鹿母経』［短］の底本は高麗藏であり、一方『鹿母経』［長］のほうは「此經與三本大異，對校甚難，故特對校明本，以宋元次別附之」（この経は、［底本の高麗蔵の読みが、宋･元･明本の］三本と大きく異なるので、明本とだけ対校し、宋本・元本は、次に別個に附記した）と注が付いている。また、中華大蔵経には『鹿母経』［短］の底本は金藏廣勝寺本であり、『鹿母経』［長］のほうは「別本」と記され、清蔵本が底本である。(2)

また後で詳しく見るように、すべての経録は竺法護訳『鹿母経一巻』を記載しているが、『鹿母経』が二部あると記している経録は一つもない。また、経録には『鹿母経』の他に " 支謙訳 "『鹿子経』も記載されている。なお、経録ではないが、『仏名経』（557 年）は「南無鹿母経　南無鹿子経」（T. 14, no. 441, 197c1）と二つの経典に言及している。

長短二部伝わっている『鹿母経』のうち、どちらかが本来のもので、どちらかが後から手が加えられた偽物のはずである。この論文は、この経の真偽について考察したものである。また竺法護訳『鹿母経』と " 支謙訳 "『鹿子経』の関係についても明らかにしたいと考えている。

一、長短二部の『鹿母経』と『経律異相』「鹿第七・鹿母落搔乞與子別還來就死一」の比較

『鹿母経』［長］、『鹿母経』［短］、そして『経律異相』録「鹿第七・鹿母落搔乞與子別還來就死一」の関係を明らかにするため、三つのテキストを逐字比較した表を作成した。

A =『鹿母経』［長］

B =『鹿母経』［短］

C =『経律異相』録「鹿第七・鹿母落搔乞與子別還來就死一」

B を見る際には A を基準とし、C を見る際には B を基準とする。A と B、B と C の異同をそれぞれ示すために、以下の表記を加えた：

［ ］= 対応する文字がない（但し長い段落の欠如には［ ］を使わない）

［＊→＊］［＊←＊］= 対応箇所の前後のズレ

____ = B に見られる A と違う表現

〰〰 = C に見られる B と違う表現

{ } = 衍字

A

佛説鹿母経（長）

佛言：

昔者有鹿，數百為群，隨逐水草，侵近人邑。國王出獵，遂各分迸。

有一母鹿，懷妊獨逝，被逐飢疲，失侶悵怏。時生二子，捨行求食。煢悸失錯，誤墮獵者弶(*v.l.* 檝)中。悲鳴欲出，不能得脫。

獵師聞聲，便往視之。見鹿心喜，適前欲殺。鹿乃叩頭，求哀自陳："向生二子，尚小無知。始自蒙蒙，未曉東西。乞假須臾，暫還視子。將示水草，使得生活。并與二子盡哀死別，長短命矣。願垂恕恩，愍及有識。若蒙哀遣，得見子者，誠非鹿獸所能報謝。天祐有德，福注罔極。見遣之期，不違信誓。旋則就死，獸意無恨。"

是時，獵者聞鹿所言，且驚且怪，衣毛為竪。其奇能言，識出人情，即問鹿曰："汝為鬼魅、山林(*v.l.* 靈)、樹神，得無變惑假借其形？以實告我，令明其故。"

鹿即答曰："吾以先世貪殘之罪稟受鹿身，至心念子，故發口能言，非為鬼魅。唯見識憐，生放死還，甘心所全。"

獵者聞之，信加其言。心懷貪欲，意不肯聽。即告鹿曰："　　世人一切尚無志誠，況汝鹿畜？憐子惜身，尚全求生。從死得去，豈有還期？王命急切，恐必知之。罪吾失鹿，更受重責。雖心不忍，事不獲已。"終不相放。

鹿時惶怖，苦言報曰："鹿雖賤畜，甘死不恨。求期則返，豈敢違命？人受罪疊，唯乞假祚，為福所種。去則子存，留則子亡。聽往時還，神信我言。夫死何足惜而違心信。顧念二子，是以懇懇。生不識母，各當沒命。分死全子，滅三痛劇。"鹿母低頭鳴噭，口説偈言：

我身為鹿獸

B

佛説鹿母経（短）

佛言：

昔者有鹿，數百爲群，隨逐美草，侵近人邑。國王出獵，遂各分迸。

有一鹿母，懷妊獨逝，被逐飢疲，失侶悵怏。時生二子，捨行求食。煢悸失措，「　」墮獵「　」弶中。悲鳴欲出，不能得脫。

獵師聞聲，便往視之。見鹿心喜，適前欲殺。鹿乃叩頭，求哀自陳："向生二子，尚小無知，始視矇矇，未曉東西。乞假須臾，暫還視之。將示水草，使得生活。

[＊]　旋來就死，[＊←不違信誓]。"

是時，獵者聞鹿所語，驚怪甚奇，

即答鹿曰："[＊]一切[＊←世人]尚無至誠，況汝鹿身？「　」從死得去，豈當還期？

終不放汝。"

鹿「　」復報言：

"聽則子存，留則子亡。「

母子俱死，不得生別。

「　」分死全子，滅三痛劇。"即便説偈，{以報獵者}：

我身爲畜獸

C

『経律異相』鹿第七

鹿母落攝乞與子別還來就死一

「　」

昔者有鹿，數百為群。隨逐美草，侵近人邑。國王出獵，遂各分迸。

有一母鹿，懷妊獨遊，被逐飢疲，失侶「　」。時生二子，捨行求食。煢悸失厝。　墮獵攝中。悲鳴欲出，不能得脫。

獵師聞聲，便往視之。見鹿心喜，即前欲殺。鹿乃叩頭，求哀自陳："向生二子，尚小無知。始視矇矇，未曉東西。乞假須臾，暫還視子。將示水草，使得生活。

旋來就死，不違信誓。"

「　」獵者「　」驚怪「　」，

即答鹿曰："一切世人尚無至誠，況「　」鹿身？

從死得脫，豈有還期？"

鹿復報言：

"聽則子存，留則子亡。"

「　」説偈曰「　」：

我身為畜狩

遊食於林藪 /
賤生貪軀命
不能故送死 //
今來入君弥
自分受刀机 /
不惜腥臊身
但憐二子耳 //
唯我前世時
暴虐(*v.l.* 害)不至誠/
不信生死苦
罪福之分明 //
行惡自招罪
今受畜獸形 /
若蒙須臾命
終不違信盟 //

於是，獵者聞鹿言訴之聲，甚歎其奇。貪利成事，不欲放遣。即告於鹿：“責數之日，夫巧偽無實，姦詐難信。虛華萬端，狡猾非一。侵暴生種，犯人稼穡。以罪投身，入于吾弥。今當殺送，供王厨食。不須妄語，欺吾求脫。重身畏死，誰能効命？人之無食，猶難為期，而況畜獸？全命免死，豈有還期？但當就死，終不相放。”

鹿時憶子恐據，前跪兩膝，低頭涕淚，悲訴鳴吟，重説偈言：

雖身為鹿畜
不識仁義方 /
奈何受慈恩
得去不復還 //
寧受分裂痛
無為虛偽存 /
哀傷二子窮
乞假須臾間 //
宿世罪自然
故受畜生体 /
為人所不信
殃禍自應爾 //
猶是招當來
欲脫畜生形 /
披肝露誠信
願聽重誓言 //
若世有惡人
鬪亂比丘僧 /
破塔壞佛寺
及殺持戒人 //
反逆害父母
兄弟與妻子 /

遊處於林藪 /
賤生貪躯命
不能故送死 //
今來入君弥
分當就刀机 /
不惜腥臊身
但憐二子耳 //

「 」[＊]獵者[＊←於是]聞鹿所語，甚奇甚異。意猶有貪，「 」復答鹿曰：“「 」夫巧偽無實，奸詐難信。虛華萬端，狡猾非一。

愛身重死，少能効命。人之無良，猶難爲期，而況禽獸？「 」去豈復還？固不放汝，不須多方。”

鹿「 」復垂涙，「 」以偈報言：

雖身爲賤畜
不識人義方 /
奈何受慈恩
一去復不還 //
寧就分裂痛
無爲虛偽存 /
哀傷二子窮
乞假須臾間 //

世若有惡人
鬪亂比丘僧 /
破塔壞佛寺
及殺阿羅漢 //
反逆害父母
兄弟及妻子 /

遊處於林藪
賤生貪躯命
不能故逆死
今來入君擕
分當就刀机
不惜腥臊身
但憐二子耳

獵者「 」甚奇甚異，意猶有貪，又答鹿曰：“ 夫巧偽無實，姦詐難信。虛華萬端，狡猾非一。

愛身重死，尠能效命。人之無良，山難為期，而況禽狩？ {將}去豈復還？固不放汝。「 」”

鹿 復垂涙， 以偈報言：

雖身為賤畜
不識仁義方
奈何受慈恩
一去不復還
寧就分裂痛
無為虛偽存
哀傷二子窮
乞假須臾間

世若有惡人
鬪亂比丘僧
破塔壞仏寺
及殺阿羅漢
返逆害父母
妻子及奴婢

設我不來還
罪大過於是 //
普世之極罪
劫盡殃不已 /
宛轉更燒煮
之彼復到此 //
可思之深重
受痛無終始 /
設我不來還
罪大過於是 //

爾時，獵者重聞鹿言，心益竦然，乃却歎曰：“唯覩世間一切人民稟受宿福，得生為人，愚惑癡冥，背恩薄義，不忠不孝，不信不仁，貪殘無道，欺偽苟全。　不知非常，識別三尊。鹿但畜生，懇懇辭言，信誓叩叩，有殊於人。情露丹誠，似如分明。識覩其驗，以察其心。”便前解弶，放遣假之。

於是，鹿母出弶得去。且顧且馳，到其子所。低頭嗅子，舐其身体。一喜一悲，踟躕徘徊，嘆息啼吟，並説偈言：

一切恩愛會
皆由因縁合 /
合會有別離
無常難得久 //
今我為爾母
恒恐不自保 /
生世多畏懼
命如露著草 //

於是，鹿母説此偈已，便將二子入于林藪，為別食稼，示好水草，誡勅叮寧，教生活道。念別子孤，涙下如雨，悲鳴摧傷，説偈別言：

前世行欺詐
負債著恩愛 /
殘暴衆生命
自盗教彼殺 //
身作如影隨
今日當受之 /
畢故不造新
當還赴彼期 //
違佛不信法
背戻師父誡 /
自用貪無厭
放情恣癡意 //
罪報為畜生
當為人作飼 /
自分不敢怨

設我不<u>還來</u>
罪大過於是 //

爾時，獵者重聞鹿言，心益<u>悚</u>然，乃却歎曰：“<u>惟</u>」　」<u>我處世</u>，得生爲人。愚惑癡冥，背恩薄義。<u>殘害衆生</u>，<u>殺獵爲業</u>。欺僞苟<u>得</u>，｛<u>貪求無恥</u>｝。不知非常，識別三尊。鹿」　」<u>之所</u>言，［＊］有殊於人。［＊←信誓<u>邈邈</u>］，　｛<u>情現盡中</u>。｝”」　」便前解弶，放<u>之令去</u>。

於是，鹿母」　」<u>至</u>其子所，低頭<u>鳴吟</u>，舐<u>子</u>身体。一<u>悲</u>一<u>喜</u>，」　」<u>而</u>説偈言：

一切恩愛會
皆由因縁合 /
合會有別離
無常難得久 //
今我爲爾母
恒恐不自保 /
生世多畏懼
命<u>危於晨露</u> //

於是，鹿母」　」將其二子，」　」示好水草。

<u>垂</u>涙<u>交流</u>，」　」<u>即</u>説偈言：

設我不<u>來還</u>
罪大過於是

」　」獵者重聞鹿言，　心益悚然，乃却歎曰：“惟　我處世，得生為人。愚惑癡冥，背恩薄義。殘害衆生，殺獵為業。詐偽苟得，　貪求無<u>厭</u>。　不知非常，識別三尊。鹿　之所言，有殊於人。信誓<u>叩至</u>，　情<u>見</u>盡<u>忠</u>。”

便前解<u>弶</u>，放之令去。

於是，鹿」　」｛<u>還</u>｝至其子所，低頭鳴吟，舐子身体。一悲一喜，　<u>並</u>説偈言：

一切恩愛會
皆由因縁合
合會有別離
無常難得久
今我為爾母
恒恐不自保
生世多畏懼
命<u>急</u>於晨露

於是，鹿母　將其二子，　示好水草。

垂涙交流，　説偈<u>別</u>言：

畢命不復欺 // 貪求取非道 殺盜於前世 / 每生為畜獸 宿命所追逮 // 結縛當就死 恐怖無生氣 / 用識三尊言 見遣盡恩愛 // 吾朝行不遇 誤墮獵者弶 / 即當就屠割 破碎受宿殃 // 念汝求哀來 今當還就死 / 憐汝小雙孤 努力自活已 // 行當依群類 止當依衆裏 / 食當隨侶進 臥當驚覺起 // 慎勿子獨遊 食走於道邊 / 言竟便長別 就死不復還 //	吾朝行不遇 誤墮獵者手 / 即當應屠割 **碎身化糜朽** // 念汝求哀來 今當還就死 / 憐汝小早孤 努力自活己 //	吾朝行不遇 誤墮獵者手 即時當屠割 碎身化糜朽 念汝求哀來 今當還就死 憐爾小早孤 努力自活已
是時，鹿母説此偈已，與子死別，遲迴再三，低頭俛仰，唱聲慼哀，委背而去。二子鳴啼，悲泣戀慕。從後追尋，頓弊復起，悲喚(*v.l.* 叫)叫叫，説訴偈言：	˩ ˨鹿母説 ˩ ˨已， **便捨** 而去。二子鳴啼，悲泣戀慕，從後追尋，頓地復起。	鹿母説已， 便捨 而去。二子鳴呼，悲涙戀慕，從後追尋，頓仆復起。
貪欲慕恩愛 生為母作子 / 始來受身形 受命賤畜体 // 如何見孤背 斷命沒終此 / 慕母情痛絶 乞得并就死 // 自念我生來 未識東與西 / 念母憐我等 當報乳養恩 // 何忍長生別 永世不復存 / 念母為我苦 不聊獨生全 // 無福受畜形 薄祐禍害至 /		

始生於迷惑
當早見孤棄 //
凡生皆有死
早晚當就之 /
今日之困(*v.l.* 因)窮
當與母同時 //

於是，鹿子說此偈已，其母悲感，低頭號泣，哀悼怨歎，迴頭還顧。抗聲悲鳴，告其子言："爾還勿來！吾自畢故，以寿當之。無得母子夭横併命。吾死甘心，傷爾未識。世間無常，皆當別離。吾自薄命，爾生無祐。何為悲哀？徒益憂患。但當速(*v.l.* 逮)行，畢債於今。" 鹿母復鳴，為子說偈言：

吾前坐貪愛
今受弊畜身 /
世生皆有死
無脫不終患 //
制意一離貪
然後乃大安 /
寧就至誠死
終不欺殆生 //

於是，鹿子聞母偈音，益更悲戀，鳴涕相尋，至于弶所。東西求索，乃見獵者臥於樹下。鹿母徑就其邊，低頭大聲，以覺獵者，而說偈言：

投分全中實
畢寿於畜生 /
見放不敢稽
還就刀几刑 //
向所可放鹿
今來還就死 /
恩慈於賤畜
得見辭二子 //
將行示水草
爲說非常苦 /
萬沒無餘恨
念恩不敢負 //

爾時，獵者聞鹿鳴聲說誠信之言，驚覺即起，心動竦然。慈心發中，口未得宣。鹿便低頭，前跪兩膝，重向獵者，喜自陳說，以偈謝言：

仁前見放遣
德厚過天地 /
賤畜被慈育
悲意不自勝 //
一切悉無常
忻然副信死 /

母顧命曰："爾還勿來。
無得母子，併命{俱死}，吾沒甘心，傷汝未識。世間無常，皆有別離。我自薄命，爾生薄祐。何爲悲憐？徒益憂患。但當建 行畢罪。"
於是，，母復，爲子說{此}偈言：

吾前生貪愛
今來爲畜身 /
生世皆有死
無脫不終患 //
制意一離貪
然後乃大安 /
寧就誠信死
終不欺殆生 //

，子，猶，悲號，戀慕相尋，至于弶所，東西求索，乃見獵者臥於樹下。鹿母住前，
說偈覺言：

前所可放鹿
今來還就死 /
恩愛愚賤畜
得見辭二子 //
將行示水草
爲說非常苦 /
万沒無遺恨
念恩不敢負 //
，獵者，
，{於是，忽}覺驚起。
鹿復，，長跪向獵者，
，，重說偈言：
君前見放去
德重過天地 /
賤畜被慈育
赴信還就死 //

母顧命曰："爾還勿來。
無得母子併命俱死，吾沒心甘，傷汝未識。世間無常，皆有離別。我自薄命，爾生無祐。何為悲懷？徒益憂患。但當建 志畢命。"
於是，母復為子說此偈言：

吾前生貪愛
今來愛持身
世生皆有死
不脫不終患
制意一離貪
然後乃大安
寧就說信死
終不欺殆生
子 猶悲戀，
鳴啼相尋，至于掘所。東西求索，乃見獵者臥於樹下。鹿母住立，
說偈覺言：

前所可放鹿
今來還就死
恩流惠賤畜
得見辭二子
將行示水草
為說非常苦
萬沒無遺恨
念恩不敢負
獵者
於是，忽覺驚起。
鹿復，，跪向，
，，重說偈言：
君前見放去
德重過天地
賤狩被慈覆
赴信來就死

滅對畢因緣
怨盡從斯已 //
仁惠恩難忘
感受豈敢違 /
雖謝千萬辭
不足報慈恩 //
唯夫誠精誠
受福歸自然 /
今日甘心死
以子屬仁君 //

於是，獵者感誠，即寐。又重聞鹿說偈，皆微妙之聲。加其篤信，捨生就死，以副盟誓。子母悲啼，相尋而至。“斯鹿之身必非凡庸，吾覩世士未能比倫。雖復獸体，心若神靈。吾之無良，殘暴來久。鹿乃立義，言信不負，可為明教。稽首稟受。豈復當敢生犯害心。”即時，獵者加肅謙敬，辭謝遣鹿而說偈言：

神鹿信若天
言誓志願大 /
今我心竦懼
豈敢加逆害 //
寧自殺鄙身
妻子寸寸分 /
何忍向天種
有想害靈神 //

獵者說此偈已，即以慈心遣鹿。重復辭謝，悔心自責。

鹿見遣去，出就其子。子望見母得生出還，強馳走趣，跳[足梁]悲鳴。子母相得，俱懽俱喜。一俛一仰，鳴聲呦呦。悲感受活，生蒙大恩，即仰頭謝獵者而說偈言：

賤畜生處世
當應充厨宰 /
即時分烹俎
寛假辭二子 //
天人重愛物
復蒙放赦原 /
德祐積無量
非口所能陳 //

爾時，鹿母說此偈，謝已，將率二子，還于深林。鳴群嘯侶，以遊以集。安身草澤，以寧峻山。

獵者於後，深自惟言：“鹿但畜生，信義祐身。既免即濟，見者加稱。我之為暴，何廣於心？”即時啟寐，散意歸

感仁恩難忘
不敢違命旨 /
雖懷千返報
{猶}不 畢恩紀 //

獵者見鹿篤信死義，志節丹誠，慈行發中，効應徵驗，捨生赴誓，
母子悲戀，相尋而至，

慈感愍傷，稽首謝
曰：

爲天是神祇
信義妙乃爾 /
恐懼情悚然
豈敢迦逆害 //
寧自殺所親
碎身及妻子 /
何忍害靈神
起想如毛髮 //

獵者 即 便放鹿使去。

母
子 悲喜， 鳴聲呦
{偈}呦， 謝獵
者：

賤畜生處世
當應充厨宰 /
即時分烹煑
寛惠辭二子 //
天仁重愛物
復蒙放捨原 /
德祐積無量
非口所能陳 //

爾時，［＊］

感仁恩難忘
不敢違命旨
雖還于反報
猶不畢恩紀

獵者見鹿篤信死義，志節丹誠，慈行發忠，放應徵驗，捨生赴誓，
母子悲戀，相尋而至，

慈感愍傷，稽首謝
曰：

為天是神祇
信義妙乃爾
恐懼情悚然
豈敢加逆害
寧自殺鄙身
害及其妻子
何忍向靈神
起想如毛髮

獵者 即 放鹿使去。

母
子 悲喜， 鳴聲呦
呦， {偈}謝獵
者：

賤畜生處世
當應充厨宰
即時分烹殂
寛惠辭二子
天仁重愛物
復蒙放赦原
德祐積無量
非口所能陳

仁，放弩壞弶，無復殺心。詣于廟寺，請稟沙門，稽首顙面，自歸自陳：“奉順慈義，畢志正真。”便往白王，具説鹿言。

王聞其説，心喜驚歎：“鹿獸有義，我更貪殘。又此鹿慧，深達言教，知仰三尊。我國弊冥，事彼妖言。誠可捨棄，以保永全。普國人民無不聞知，畜獸行義，現獲信證。大道之化，無隱不彰。”於是，國王即請會群臣，宣令國民：“吾之為闇，不別真偽。啟受邪師，言畏偽神。妖祭無道，殘暴衆生。不如鹿畜，明識三尊。自今已後，普國率民廢彼邪宗，皆歸正真。詣于佛寺，請受聖衆。冀以後世，長獲其福。”臣下、群僚、國民大小皆信三尊，奉五戒十善。為期三年，國豐太平。民皆寿樂，鹿之祐矣。

佛語賢者阿難：“唯吾善權，累劫行恩。恩救衆生，其信如是。爾時鹿母者，我身是也；二子者，　　羅云及朱離母[貝可]是；國王者，舍利弗是；獵者，阿難是；界上民走白王者，調達是。”

佛時説已，於鹿臍腸，放大光明，遍照東西南北四隅十方各千佛刹，吾其光明所之。各有化導，師子座及宝蓮華，或為法師比丘現肉体者，或為帝王及長者子者，或凡人黎庶現卑賤者，或人群生為畜獸者。各各以光明導御説法。爾時所説，鹿母信誓功德，以為法訓。法音入心，莫不信受，其者皆歸無上正真之道。佛即迴光等接遍照闇浮提内，悉令普徹。其蒙光者逮安隱想。

爾時，衆中有八百比丘，意志四道，以證道迹。聞説鹿母於畜生之中發起大意，以信成道，感悟變化，即時反悔。前白佛言：“願立信誓，為菩薩道。唯佛加哀，助利我等。當以建行，荷負衆生。救濟一切，至死不離。”即時逮得僧那僧涅弘誓之鎧。

爾時，阿難整服長跪，白世尊言：“此諸比丘網惑大乘，不受正諦。如今開悟，逮得法證，離淵越塹，何其疾也。誠非小道所能信明。大會有疑，唯願世尊説其縁由，以釈將來。”

佛言：“善哉阿難！汝問快也！斯承先識，非今所造。是諸比丘迺昔鹿遊國民，信受王命，奉順三宝，加鹿即感。

獵者具以聞王。

國人咸知，普感慈信。鹿之仁行有喻於義，莫不肅歎，爲止殺獵。[＊←]於是，鹿還，鳴群嘯侶，以遊以集，各寧其所。

佛語「」阿難：“　昔吾所更，勤苦如是。爾時鹿「」者，我身是「」；二子者，羅云及{羅漢}朱利母「」是；{其}國王者，舍利弗是；{時射}獵者，汝身是。

獵者具以聞王。

國人咸知，普感慈信。狩之仁行有踰於義，莫不肅嘆，為止殺獵。「　」鹿還，鳴群嘯侶，「　」遊「　」集，各寧其所。

佛言：

“「　」時鹿者，我身是；二子者，羅云、「　」朱利母是{也}；時國王者，舍利弗是；「」射獵者，阿難是。”

佛説鹿母経 A	佛説鹿母経 B	（出『鹿子経』） C
皆願無上正真意。中間癡闇不復習行。雖以遇我，得作沙門。忽棄本願，迷於大乘。今聞我説前世本末，閉結疑解，得無想安隱，是其宿命識神使然。” 佛説是時，八百比丘皆得阿惟越致。力士聚中有八千人，見證心解，除放逸行，皆發無上正真之道。逮得入信，聲尋獲安隱無想之定。天龍、世人七億二千皆發無上正真道意。 佛語阿難：“我作畜生之時，以不忘菩薩弘濟之心，應行導利，逮于今者，但為衆生勤苦無極。假使一人亡本沒流，未拯拔者終不捨放。諸欲求安，逮是功德，疾成佛者，皆當盡心中誠，歸信三尊。世世不廢，如我今日現般泥洹，誠信所致也。阿難！汝當受持，廣宣此経，無令滅絶。” 阿難即前，稽首作禮，受持諷誦。	我之所入，興隆道化。種善無厭，分徳不住。雖在禽獸，不忘菩薩。權行如應，導利一切。普使衆生度濟獲安。逮是功徳，疾成至佛眞人。至誠忠信，不可不作。”	

二、語彙分析からみるA及びBの翻訳者

AとBには話の筋の順番や表現の違いがあり、またBには文の脱落もある。しかし、両者の内容と語彙が基本的に一致していることは、上の比較表を見れば分かる。長い段落の欠如部分を除けば、AとBの間で異なる文字は335字しかない。従って、AとBの翻訳者は同一人物の可能性が高い。

BとCは話の筋が同じであるだけでなく、語彙も殆ど一致している。欠けている部分を除けば、異なる文字は63字しかない。なお、Cの文末に「出『鹿子経』」となっている点が注目される。

このように複数の漢訳仏典の内容が同一である、または類似している場合の研究方法について、林屋友次郎は次のように指摘している。「同一名、類似名、異名に依る同類経を決択する上に最後的の決定を与えるものは、その経が現存する限り、ある時代の訳語、訳風、ある訳者の訳語、訳風の研究よりせるその経典の訳出年代、訳者の研究でなければならない」(3)。本稿でも語彙を基準にした検討を行うことにしたい。

そこで、AとBの語彙を分析し、翻訳者について考察してみよう。

(一)『鹿母経』［長］(=A) は竺法護訳か否か

現存最古の経録、僧祐撰『出三蔵記集』以下、すべての経録は、『鹿母経』を竺法護（265-308年に翻訳に従事）の訳としている。(4)『鹿母経』［長］には竺法護訳に頻出する単語が多く使わ

れている。

(A) 竺法護訳の特徴とし得る語句

① 忻然

456a22. 一切悉無常　忻然副信死　滅對畢因縁　怨盡從斯已（v）

「忻然」は喜んでいる様子。『史記』「周本紀」に「姜原出野，見巨人迹，心忻然説，欲践之，践之而身動如孕者。」とある[5]。四世紀までの漢訳仏典に「忻然」はわずか 18 例しかなく、竺法護の筆受だった聶承遠訳『超日明三昧経』（290 年）を除き、ほかの 17 例すべてが竺法護訳に見られる。竺法護訳のメルクマール――竺法護訳であることを示す特徴的表現――の一つである。

心懷忻然　如得滅度　爾等及吾　諸難以除（『正法華経』, T. 9, no. 263, 94a22）

寂然心定永安，是忍辱報；其心忻然，寂定安隱，無有衆魔，是精進報。（『賢劫経』，T. 14, no. 425, 29a14）

使發道心，歡喜悦豫，加大篤信，忻然如是，堅固精進。（『度世品経』，T. 10, no. 292, 628b17）

（諸菩薩等）心抱悦豫，忻然安隱，自從坐起，迎逆稽首，踊在虚空，散衆天華，口宣妙言 。（『漸備一切智徳経』，T. 10, no. 285, 465b27）

② 稽首頴面

457a16. 詣于廟寺，請稟沙門，稽首頴面，自歸自陳：「奉順慈義，畢志正真。」

「稽頴」は古代の敬礼の一種で、跪き、額を地に着けて、敬虔を表す行為を意味する。『儀禮』「士喪禮」に「弔者致命，主人哭拜，稽頴成踊。」、『漢書』「李廣伝」に「若乃免冠徒跣，稽頴請罪，豈朕之指哉！」の用例が辞書に採られている。[6] 四世紀までの漢訳仏典に、「稽頴」はわずか 8 例しか出ない。そのすべてが竺法護訳にのみ見える。これも竺法護訳のメルクマールとなる。次に例を示す。

雄猛將士奮武剋捷，莫不稽頴。（『正法華経』，T. 9, no. 263, 109b29）

三界特尊，無不稽頴，必當成仏，度脱十方。（『普曜経』，T. 3, no. 186, 509a2）

天龍、鬼神、世間、人民、梵、釈、魔王莫不稽頴受仏化者。（『月光童子経』T. 14, no. 534, 816b7）

(B) 竺法護訳に多くみられる語句

① 報曰

455b12. 鹿時惶怖，苦言報曰：……

「答える、または報告して言うには」という意味。竺法護訳コーパスには、「報言」が 37 回見られ、「報曰」は 160 回も使われている。例えば『阿惟越致遮経』、『修行道地経 』、『生経』、『普

曜經』、『正法華経』、『文殊支利普超三昧経』等、すべての竺法護訳に見られる。一方、後漢の支婁迦讖訳『雑譬喩経』、安世高譯『大安般守意経』、『迦葉結経』、曇果共康孟詳譯『中本起経』、康孟詳譯『興起行経』、呉の康僧會譯『六度集経』、支謙譯『戒消災経』に見える「報言」の用例は合わせても 15 個にすぎない。

② 衣毛

455b1. 是時，獵者聞鹿所言，且驚且怪，衣毛為竪。其奇能言，識出人情。

「衣毛」とは体毛のことである。(7) 四世紀までの漢訳仏典に約 90 例あまりが見られ――支婁迦讖、支謙安法欽、法炬、瞿曇僧伽提婆などの訳にも見える――そのうちの 40 例が竺法護訳『修行道地経』、『生経』、『正法華経』、『文殊支利普超三昧経』、『賢劫経』、『度世品経』、『漸備一切智徳経』、『普曜経』などにある。

③ 鬼魅

455b2. 汝為鬼魅、山林（*v.l.* 靈）、樹神，得無變惑假借其形？以實告我，令明其故。

「鬼魅」は、妖怪という意味。四世紀までの漢訳仏典に訳約 30 例あまりが見られ――康僧会、法炬共法立、佛馱跋陀羅、竺佛念などの訳にも見える――、そのうちの 11 例が竺法護訳『修行道地経』、『生経』、『正法華経』、『大方等頂王経』、『月光童子経』に用例がある。

④ 破碎

456a22. 吾朝行不遇 誤墮獵者弶 即當就屠割 破碎受宿殃（v）

「破碎」は破壊する，また破損、破裂という意味。先秦時代の『荀子』「法行」にすでに「『詩』曰：『涓涓源水，不雝不塞。轂已破碎，乃大其輻。』事已敗矣，乃重太息，其云益乎？」とある。四世紀までの漢訳仏典に 29 例あるが、そのうち 14 例が竺法護訳『正法華経』、『文殊師利仏土嚴淨経』、『賢劫経』などに見える。

⑤ 来久

456c24. 吾之無良，殘暴来久。

「来久」は「昔から」という意味。(8) 四世紀までの漢訳仏典に 38 例が見られ――康僧会訳『六度集経』、支謙訳『大明度経』にも見える――そのうちの 25 例は竺法護訳『大方等頂王経』、『光讃経』、『正法華経』、『普曜経』などに出る。

⑥ 奉順

457a16. 詣于廟寺，請稟沙門，稽首頴面，自歸自陳：「奉順慈義，畢志正真。」

「奉順」は、「（尊敬の念を抱き）受けて従う」の意味。『戦国策・燕策三』：「寡人不佞，不能奉順君意，故君捐國而去，則寡人之不肖明矣。」など古くから見える表現である。(9) 四世紀までの漢訳仏典には、31 例見える。法炬・法立訳『法句譬喩経』（306 年）と白法祖訳『仏般泥洹経』（307 年）に、「奉順四時」という同一の表現が見える。それ以外の 29 例は、みな竺法護訳にある。例えば、『正法華経』、『持心梵天所問経』、『文殊師利三昧経』、『宝女所問経』、『劫賢経』、『漸備一切智徳経』、『仏般泥洹経』、『大哀経』等。

⑦ 導御

457b9. 師子座及宝蓮華，或為法師比丘現肉体者，或為帝王及長者子者，或凡人黎庶現卑賤者，或人群生為畜獣者，各各以光明導御説法。

「導御」は「教え導く」の意味。『漢語大詞典』には採られていない。四世紀までの漢訳仏典に、「導御」は 59 例見える。[10] そのうち、無羅叉訳『放光般若経』（291 年）に 2 例、聶承遠訳『超日明三昧経』（290 年）に 2 例、瞿曇僧伽提婆訳『中阿含経』（398 年）に 1 例見えるのを除けば、ほか 54 例はすべて竺法護訳に見られる。例えば：『無言童子経』、『舍頭諫太子二十八経』、『方等般泥洹経』、『海龍王経』、『光讃経』、『正法華経』、『持心梵天所問経』など。これも竺法護訳のメルクマールと言えよう。

⑧ 癡闇

457b26. 是諸比丘迺昔鹿遊國民，信受王命，奉順三宝，加鹿即感，皆願無上正真意。中問癡闇，不復習行。

「癡闇」は「愚かで、物事の道理をわきまえない」の意味。『漢語大詞典』には採られていない。四世紀までの漢訳仏典に「癡闇」は 11 例出、竺法護訳の例が最も古い。[11] 僧伽提婆訳『三法度論』（391 年）に 1 例、瞿曇僧伽提婆訳『増一阿含経』（397 年）に 1 例出る以外、他の 9 例はすべて竺法護訳に見える。例えば、『普曜経』、『心明経』、『光讃経』など。

⑨ 閉結

457b28. 今聞我説前世本末，閉結疑解，得無想安隱，是其宿命，識神使然。

「閉結」は「わだかまり、懸念、疑問」の意味。『漢語大詞典』の例は 12 世紀『朱子語類』採ったものである。[12] 漢訳仏典には 7 例しかなく、支曜訳『成具光明定意経』（179 年）に 1 例、竺曇無蘭訳『見正経』に 1 例見える以外、残り 5 例は、竺法護訳『阿惟越致遮経』、『普門品経』、『文殊悔過経』に見られる。

⑩ 恩慈

456c5. 恩慈於賤畜　得見辭二子（v）

「恩慈」は「親切、好意、寛容」の意味。[13]『漢語大詞典』は南朝陳徐陵『為貞陽侯與王僧辨書』の例を引いている：「被此恩慈，如何酬答」。[14] 四世紀までの漢訳仏典に「恩慈」は 21 例あり、そのうち 9 例が『正法華経』、『海龍王経』、『漸備一切智徳経』、『大哀経』などの竺法護訳にみられる。

⑪ 善權

457a29. 仏語賢者阿難：「唯吾善權，累劫行恩。恩救衆生，其信如是。……」

「善權」は、梵語 *upāya-kauśalya* の訳で、「巧みな手立て」を意味する。「善巧方便」と同義である。竺法護訳以前の仏典――『六度集経』、『大明度経』など――にも見られるが、竺法護訳『正法華経』、『度世品経』、『漸備一切智徳経』、『修行道地経』、『方等般泥洹経』などに 340 例以上見られる。竺法護の好んだ表現と言えよう。

以上であげた例のほか、「後悔しない」という意味の「無恨」、命の短いことを表す「露」など竺法護訳に特徴的に現れる表現が幾つか見られる。上で見た「忻然」、「稽首頴面」のような竺法

護訳にしか使われていない表現が使われていることから見ても、『鹿母経』［長］は疑いなく竺法護訳であろう。

（二）『鹿母経』［短］（= B）は支謙訳か否か

『経律異相』「鹿第七・鹿母落搔乞與子別還來就死一」の最後に「出『鹿子経』」となっているが、全文 1026 字のうち、965 字が『鹿母経』［短］（= B）と同じである。すでに上に述べたように、短編『鹿母経』（= B）の全文 1186 字のうち、851 字は『鹿母経』［長］（= A）と一致している。ところで、『出三蔵記集』などの経録は、『鹿子経』を支謙訳と記している。(15) この記述は、『鹿子経』＝『鹿母経』を意味しているのであろうか。

『鹿母経』［短］（= B）に出る語彙を、大正蔵データベースを使って調査したところ、以下に列挙する表現は、支謙訳であることが確実な経典には全く見られないことがわかった。

① 矇矇

454a13. 向生二子，尚小無知，始視矇矇，未曉東西。

A の対応部分には、「向生二子，尚小無知。始自蒙蒙，未曉東西」とある。「矇矇」は、ものがはっきり見えない様子を意味する。漢訳仏典では、安玄訳『法鏡経』（181 年）に初めて現れ、また康僧会訳『六度集経』（251 年）、仏陀耶舎・竺仏念訳『長阿含経』（413 年）などにも見られる。伝 (16) 支謙訳『菩薩本縁経』にも出るが、この経は、五、六世紀の作と考えられている。(17)

② 狡猾

454a27. 夫巧僞無實，奸詐難信。虚華萬端，狡猾非一。

A の対応部分と完全に一致している。漢訳仏典では、竺法護訳『生経』（285 年）が最も古い例である。

③ 殺獵

454b11. 殘害衆生，殺獵爲業。欺僞苟得，貪求無恥。

455a4. 國人咸知，普感慈信。鹿之仁行有喩於義，莫不肅歎，爲止殺獵。

A にはこの二カ所に対応する部分がない。漢訳仏典では、法炬・法立訳『法句譬喩経』（306 年）に初めて「殺獵」が見られる。

④ 識別

454b12. 殘害衆生，殺獵爲業。欺僞苟得，貪求無恥。不知非常，識別三尊。

A の対応部分と完全に一致する。漢訳仏典においては、竺法護訳『方等般泥洹経』（269 年）から見える表現である。(18) ほかに『生経』、『度世品経』、『大哀経』などにも見られ、竺法護訳の色が濃い表現である。

⑤ 信誓

454b12. 信誓邈邈，情現盡中。

A には対応部分がない。「誠のある誓い」の意。先秦ですでに使われているが、漢訳仏典では、竺法護訳『正法華経』（286 年）に初めて見られる。

⑥ 糜朽

454b23. 即當應屠割　碎身化糜朽（v）

Aの対応部分には、「破碎受宿殃」とある。漢訳仏典において、「糜朽」は他の漢訳仏典には見られない。

⑦ 悲憐

454b29. 何爲悲憐？徒益憂患。

Aの対応部分には、「何為悲哀？徒益憂患」とある。「悲憐」は「哀れむ」の意味。先秦から見える表現である。『商君書』「兵守」に「悲憐在心，則使勇民更慮，而怯民不戰。」とある。 漢訳仏典では康僧会訳『六度集経』から見える。

⑧ 悲號

454c7. 子猶悲號，戀慕相尋。

Aの対応部分には、「鹿子……益更悲戀」とある。「悲號」は、漢訳仏典では康僧会訳『六度集経』から見られ、また法炬・法立訳『法句譬喩経』（306年）にも出る。伝支謙訳『菩薩本縁経』、『撰集百縁経』にも見えるが、いずれも5-6世紀の翻訳である（注10, 11参照）。

⑨ 命旨

454c17. 感仁恩難忘　不敢違命旨（v）

Aの対応部分には、「感受豈敢違」とある。「命令」の意味。法盛訳『菩薩投身飴餓虎起塔因縁経』（439年）、宝雲訳『仏本行経』（453年）に見られる。

⑩ 恩紀

454c18. 感仁恩難忘　不敢違命旨　雖懷千返報　猶不畢恩紀（v）

Aの対応部分には、「不足報慈恩」とある。「恩紀」は、「恩、恩情」という意味。『漢語大詞典』は、『後漢書』「孔融伝」:「孤與文舉既非舊好，又於鴻豫亦無恩紀，然願人之相美，不樂人之相傷，是以區區思協歡好。」などの例を引いている。[19] 漢訳仏典では、他に例がない。

⑪ 悲戀

454c20. 母子悲戀，相尋而至。

Aの対応部分には、「子母悲啼」とある。「悲しみ、名残を惜しむ、慕わしく思う」の意味。『漢語大詞典』は南朝・梁蕭子良『浄住子』「礼舍利宝塔門」の例を引いている。[20] 四世紀までの漢訳仏典では、後漢代竺大力共康孟詳訳『修行本起経』（197年）に初めて使われた後、竺法護訳『普曜経』や竺佛念訳『出曜経』にも見られる。

⑫ 慈信

455a3. 國人咸知，普感慈信。

Aに対応する文がない。「慈信」は「哀れみと信義」の意味。『漢語大詞典』に採られていない。竺法護訳『宝女所問経』（287年）などに見られる。

⑬ 仁行、肅歎

455a4. 國人咸知，普感慈信。鹿之仁行，有喩於義，莫不肅歎。

Aには対応部分がない。「仁行」は「慈しみのある徳行」の意味。漢訳仏典では、支曜訳『成具光明定意経』(179年)から見える。また竺法護訳『正法華経』や竺仏念訳『出曜経》などに見られるが、しかし支謙訳には見られない。「肅歎」は「敬い讃嘆する」の意味。『漢語大詞典』には採られていない。漢訳仏典でも、他に例がない。

⑭ 汝身

455a8. 時射獵者，汝身是。

Aの対応部分には、「獵者，阿難是」とある。「汝身」は伝支謙訳『菩薩本縁経』、『撰集百縁経』に見られるが、いずれも5世紀以後の訳である(注10, 11参照)。竺法護訳『方等般泥洹経』、『正法華経』などに見える。

⑮ 効應徵驗

454c19. 鹿篤信死義，志節丹誠，慈行發中，効應徵驗，捨生赴誓……

Aの対応部分には、「獵者感誠，即寐。又重聞鹿説偈，皆微妙之聲。加其篤信，捨生就死，以副盟誓」とある。「効應徵驗」は、「(もし真心から子供を思う気持ちを起こすならば、必ず)結果をもたらす」という意味である。「効應」は、「反応、結果」という意味。詞典には『後漢書』「方術伝下・郭玉」にみる「和帝時，為太醫丞，多有效應。」の例が引かれている。[21] 漢訳仏典では、Bの他は不空訳『大雲経祈雨壇法』(771年)にのみ見える。「徵驗」は、「(予言などが)当たる、実証する、証明する」という意味で、漢訳仏典では、この用例しかない。『漢語大詞典』は宋『稽神録』「建州狂僧」を引いているが、[22] それ以前の成立である、慧皎撰『高僧伝』(519年)、道宣撰『続高僧伝』(649年)や『法苑珠林』(668年)などにも見える。

⑯ 度濟

455a10. 普使衆生度濟獲安。

「(彼岸)に渡る。(苦しみを)乗り越える」の意味。漢訳仏典において竺法護訳『生経』(285年)から見られる。同『海龍王経』、『賢劫経』などにも見られる。

⑰ 豈當

454a17. 從死得去，豈當還期？

Aの対応部分には「豈有還期」とある。「豈當」は「どうして～か」という反語の意味を表す。漢訳仏典では、康僧会訳『六度集経』(251年)から見える。また法炬・法立訳『法句譬喩経』、竺法護訳『正法華経』などにも見られる。

以上考察したように、『鹿母経』[短](= B)は全文が僅か1186字しかないにもかかわらず、以上で見たように、支謙訳に一度も出ない単語が少なくとも19個も存在している。このことから、『鹿母経』[短]が支謙訳である可能性は極めて低いと考えられる。

三、経録についての考察

『鹿母経』及び『鹿子経』に関する記載は、現存する最古の経録、僧祐撰『出三蔵記集』(518年,

T. 55, no. 2145）に見える。

『鹿母経』は、『出三蔵記集』巻二に記載があり、「一巻 …… 竺法護訳」となっている（9a23）。『出三蔵記集』の記載の慣例から見て、僧祐は、道安の『綜理衆経目録』（道安録。安録。364 年。散逸）に従い、この経名を抄録したと思われる。

一方、『鹿子経』は、『出三蔵記集』巻二に、「『別録』に記載がある。『道安録』にはない。支謙訳である」と記されている。[23] この「別録」とは、『衆経別録』（作者不明。5 世紀末～ 6 世紀成立）を指すと考えられている。[24]

換言すれば、道安は『鹿母経』を目にした。僧祐はその『道安録』に従い『鹿母経』を転載したが、この経典そのものを自らの目で確認したのかは分からない。僧祐は、さらに『衆経別録』が記載した『鹿子経』も転載したと考えられる。

おそらく、僧祐は、『鹿母経』と『鹿子経』の現物を見て、比較するというようなことはしていないであろう。

費長房撰『歴代三宝紀』（597 年, T. 49, no. 2034）の巻六に、『鹿母経』が記載されているが、「一巻」で、竺法護訳となっている。さらに巻十三＜入蔵録＞にも記載されている。[25] 同巻五には、『鹿子経』について、「『鹿子經』一巻（『安錄』無。祐云：見『別録』。及竺道祖『呉録』亦載。）」（T. 49, no. 2034, 57c12）と記載してある。上述のように、『出三蔵記集』は「別録」にだけ言及し、費長房は竺道祖（347-419 年）撰『呉録』にも言及している。なぜだろうか。二つの可能性がある。

一つは、費長房が、竺道祖『呉録』に『鹿子経』が支謙訳とあるのを見、自身でも経典の内容を確認した上で、『鹿母経』と『鹿子経』は別のものと認識して、二つとも記載したというものである。もう一つは、費長房は、僧祐の場合と同様、経典の中身を確認せず、単に経典の名前が異なることを理由に、二つとも記載したというものである。後者の可能性が高いであろう。なぜなら、一般に費長房の『歴代三宝紀』の記載は信憑性に欠けるとされているからである。[26]

後代の智昇は『開元釈教録』（730 年）において、「竺法護訳『鹿母経』とは別に支謙訳『鹿子経』があるが、これは『鹿母経』と経文が同じである。『歴代三宝紀』が支謙訳『鹿子経』と記載するのは誤りである。」と明記し、『鹿子経』を「入蔵録」から除去した。[27]、[28]

ほかに、道世『法苑珠林』（668 年）巻六十五にも『鹿子経』が言及されている：

> 晉周子長，僑居武昌五丈浦東堈頭。咸康三年，子長至塞溪浦中愁家。……子長先能誦『四天王』及『鹿子經』。（T. 53, no. 2122, 785c10-15）

道世の引文によれば、咸康三年（337 年）に『鹿子経』はすでに世に流伝していた。この年代であれば、支謙訳と竺法護訳いずれの可能性ともありうる。

本稿「一」に示した比較表で見た通り、『経律異相』の引用 1028 字のうち、965 字が『鹿母経［短］と同じである。そして、その引用の最後には、「出『鹿子経』」と書かれている。ということは、『鹿母経』［短］こそが、『開元釈教録』がいう『鹿子経』ではないだろうか。宝唱が『鹿

子経』は『鹿母経』と内容が同じだと認識したかどうかは不明だが、法経撰『衆経目録』(594 年)、道宣撰『大唐内典録』(664 年)、明佺等撰『大周刊定衆経目録』(695 年)の著者たちが、『鹿子経』を『鹿母経』と同一視した可能性は否定できない。

また、経録ではないが、日本古写経に、鎌倉中期写金剛寺一切経の『鹿母経』、平安院政期写興聖寺一切経の『鹿母経』、また平安院政期写七寺一切経『鹿子経』(その名前は、七寺所蔵『貞元目録』中の録外目録に見える)がある。[29] 大正蔵の『鹿母経』[短](= B)と基本的に同じテキストであり、異なる字はそれぞれ 76 字、112 字、70 字(しかも共通している異なる文字は 20 字もある)にすぎない。この三本の古写経は 11 世紀後半から 13 世紀後半にかけて書写されたものである。七寺本の題目は『鹿子経』となっていることも非常に興味深い。[30] 前述のように、智昇が『開元釈教録』(730 年)で、「竺法護訳『鹿母経』とは別に支謙訳『鹿子経』があるが、これは『鹿母経』と経文が同じである。……」と指摘するまでの間、二つの経題は、長く混同されてきたに違いない。七寺本の題目はこのことを証左する。またその内容が『鹿母経』[短]と同じため、七寺本は智昇が『開元釈教録』で指摘した『鹿子経』であろう。

『出三蔵記集』が引く『衆経別録』に記載される " 支謙訳 "『鹿子経』が、『鹿母経』[短]なのかどうかは、まだ不明であるが、「二(二)」で考察したように、語彙から見て、『鹿母経』[短]は支謙訳とは考えがたい。

なお、北涼中印度三蔵曇無讖訳『優婆塞戒経』(426 年頃)巻 6〈五戒品 22〉に次の一文がある[31]:

> 是故我於《鹿子經》中告鹿子母曰:“雖復請佛及五百阿羅漢, 猶故不得名請僧福。若能僧中施一似像(*v.l.* 像似)極惡比丘, 猶得無量福德果報。何以故?如是比丘雖是惡人, 無戒、多聞, 不修善法, 亦能演説三種菩提, 有因有果, 亦不誹謗佛法僧寶, 執持如來無上勝幡, 正見無謬。”(T. 24, no. 1488, 1065a14-20)

ここで引用されている『鹿子経』の内容は、『大正蔵』の『鹿母経』と全く異なる。もし『優婆塞戒経』が偽経でなければ、インドに『鹿子経』という名前の経典が存在したことの証拠になるであろう。しかし、この引用文にある「福徳果報」、「三種菩提」は、4 世紀後半以後の漢訳仏典にようやく現れた表現であり、また「修善法」、「仏法僧宝」という表現は支謙訳に一度も使われたことがないことから、この『鹿子経』は支謙訳『鹿子経』を踏まえたものではないことは明らかである。

従って、確実に支謙訳『鹿子経』が存在していたことを証明できる有力な証拠はいまだない。

四、『大正蔵』本 A と B の先後に関して

『大正蔵』の『鹿母経』[短](= B)は全文 1186 字のうち、851 字が『鹿母経』[長](= A)と

一致しているから、二者は同本重訳ではないと推測できる。可能性としては、(1) A が先ず訳され、それを省略して B が作られた；(2) B が先ず訳され、それを増広して A が作られた、の二つがある。

唐代の『衆経目録』、『道宣録』や『大周録』に「『鹿母経』，四紙；『鹿子経』，三紙。」との記載がある。また唐『衆経目録』の記載も同じである。この「紙」に関しては，方廣錩の文章[32]を引用しておく：

> 『大正蔵』の『鹿母経』は 94 行がある。『大正蔵』本は一行に 17 字があり、歴代の大蔵経の格式と同じであるため、一行は一行に相当する。唐代の経典書写用の紙一枚には、28 行に書いたので，『大正蔵』本も唐代と同様に 28 行にした。
>
> 『鹿母経』を書写には四紙が要したというのは，唐代の『衆経目録』、『道宣録』、『大周録』が記載した四紙と完全に一致する。
>
> 紙の数を記録した諸経録はみな、『鹿母経』は四紙と書いてあり、ただ『開元録』だけは三紙と記載している。紙の産地が違うからではないだろうか。『鹿母経』に偈頌は少なくない。古代に経典を抄写した際、偈頌の場合二句を一行（5 言の偈頌なら、10 字一行；7 言の偈頌なら、14 字一行）に書くこともでき、また 4 句を一行（5 言の偈頌を 20 字一行）に書くこともできた。『鹿母経』は 94 行あり、紙一枚 28 行に抄写すると計算すれば、4 紙になる。『鹿母経』には、五言の偈頌は 40 行があるため、経典全体では 74 行に書くこともできた。紙一枚に 28 行に書いたならば、3 紙になる。だから『開元録』が三紙と記載したのも道理に合う。
>
> 『大正蔵』の『鹿母経』は 227 行がある。紙一枚に 28 行に抄写すれば、8.1 紙が必要なはずだ。唐代なら、書写の一枚目の紙は一般に 26 行に書いていたため、間違いなく 9 紙が必要のはずである。しかし、今日までこのような記載をした経録は一部もない。

以上の理由から、方氏は B が先に翻訳され、A は B を増広したものだと考えている。

しかし、B が先に成立したことを証明するのに、これら経録が記載した『鹿母経』の長さを根拠とするのは不十分だと思われる。

私は、方氏とは逆に、A が先に世に出て、B はそれの簡略本と見ている。その理由は次の通りである。

(1)　B の語彙に、成立がかなり遅い表現がある。上の（二）で見た「命旨」（⑨）は、B 以外では、五世紀の仏典に見られ、また「効應」（⑮）は、八世紀の仏典に見られる。さらに「徴驗」（⑮）、「糜朽」（⑥）、「恩紀」（⑩）などの訳語は、他の漢訳仏典に見えない。これらは B の成立が遅いことを示している。

(2)　梵語 *atha*（*khalu*）は、段落のはじめにきて、「そこで、それでは、さて」を意味し、新しい話題、状況を示す表現である。[33] 漢訳仏典では、「時」「是時」「爾時」「於是」などと訳される。

B の方は 1186 字で、A の方は 3030 字ではあるが、A にあって B にない、長い段落及び偈頌は、

合計 1613 字がある。この 1613 字を除き、残りの 1417 字で比較してみたい。

まず A をみると、「時」は 4 カ所、「於是」は 7 カ所、「是時」は 2 カ所、「爾時」は 4 カ所、合計 17 カ所出現する。一方、B は、「時」は 1 カ所、「於是」は 6 カ所、「是時」は 1 カ所、「爾時」は 2 カ所、合計 10 カ所のみである。

		時	於是	是時	爾時	合計
A	1417 字	4	7	2	4	17
B	1186 字	1	6	1	2	10

これは何を意味するのであろう。

達意的な翻訳をした支謙・鳩摩羅什たちに対して、安世高・支婁迦讖・竺法護は、原文を逐語的に翻訳した。インドの原文では、*atha*（*khalu*）が頻繁に出てくる。それを全部翻訳すると、漢語としては不自然な表現になる。しかし、竺法護などはそれを逐一翻訳しているのである。一方、翻訳経典に手を加えて編纂した『経律異相』などの類書では、このような漢語として不自然な単語は往往にして省かれている。

例として、竺法護訳『生経』とこれを潤色した『経律異相』を比較してみよう。『生経』にはサンスクリットのテキストがないので、確かに *atha*（*khalu*）の翻訳であるとは断定できないが、その可能性の高いものを選んだ。

		時・爾時・是時	於是	合計
『生經』「五百幼童經」	592 字	6	0	6
『經律異相』「幼童聚沙為塔」	192 字	0	0	0

		時・爾時・是時	於是	合計
『生經』「拘薩羅國烏王經」	1275 字	13	2	15
『經律異相』「烏王甘蔗所領四烏使至沙竭國」	430 字	3	1	4

		時・爾時・是時	於是	合計
『生經』「夫婦經」	1105 字	11	1	12
『經律異相』「梵志棄端正婦於樹上愛著鄙婢後悔無益」	465 字	1	0	1

		時・爾時・是時	於是	合計
『生經』「鼈獼猴經」	874 字	6	0	12
『經律異相』「暴志前生為鼈婦」	388 字	2	0	2

宝唱が『経律異相』を編纂した際、元の翻訳仏典にあった「時」・「是時」・「爾時」・「於是」を削ったことは明白である。

さて、上に述べたように、これらの表現は、B では A と比べてほぼ半減している。もし、B が先に訳されたなら、故意に漢語らしくない表現を使って増広したことになるが、これは極めて不自然なことである。むしろ、竺法護が原典を逐語訳してできた A を、後の時代の人が添削して B を作った可能性が高い。

(3)「言」の用法

A には、「口説偈言」・「重説偈言」・「並説偈言」・「説訴偈言」・「告其子言」・「為子説偈言」・「而説偈言」(3 カ所)・「以偈謝言」・「白佛言」・「白世尊言」など、“いう”を表す動詞 +「言」という表現が、合計 12 例ある。B の対応部分の表現と較べてみよう。

A	B
口説偈**言**：……	即便説偈，以報獵者：……
重説偈**言**：……	以偈報**言**：……
並説偈**言**：……	而説偈**言**：……
説訴偈**言**：……	–
告其子**言**：……	母顧命曰：……
為子説偈**言**：……	爲子説此偈**言**：……
而説偈**言**：……（3 カ所）	説偈覺**言**／／稽首謝曰／／謝獵者：……
以偈謝**言**：……	重説偈**言**：……
白佛**言**：……	–
白世尊**言**：……	–

これらの「言」は、「いう、話す」という意味の動詞ではなく、「曰」と同じく、引用を示す。(34) 上の表から分かるように、A で「言」とある 12 カ所のところ、B では完全に欠けているところを除き、9 カ所のうち、二カ所で「言」がなく、また二カ所で「曰」となっている。

これらの「言」は、梵語や俗語の *iti* や *ti* の訳語であり、引用に使われ、漢訳仏典には多く出る。例えば：

其人心中歡喜，意自**念言**：“……”（支婁迦讖譯《無量清淨平等覺經》T12, no.361, 292c11）

佛爾時便**說**偈**言**：……（支謙譯《慧印三昧經》T15, no.632, p.463c9）

持牙者言如角，持鼻者**對言**：“……”復於王前共**訟言**：“……”鏡面王……便**說**偈**言**：……（康僧會譯《六度集經》T3, no.152, 51a7-10）

（眾比丘）心俱**念言**：“……”（同，《六度集經》T3, no.152, 50c4）

於是，阿那律為阿難**說**偈**言**：……（竺法護譯《方等般泥洹經》T12, no.378, p.914b4）

彼時有菩薩……**白**世尊**言**：“……”（竺法護譯《生經》T3, no.154, 85b22）

於是，彌勒菩薩心自**念言**：……（同，《正法華經》T9, no. 263, 63c16）

比丘見已，**語**其婦**言**：“汝何以來？”**答言**：“汝喚，故來。”（安法欽譯《阿育王傳》T50, no. 2042, 125a26-27）

『漢語大詞典』には、「言」は特定の人物の発言の引用という用例は見られない。[35] 実際には上古の非仏教文献――『左傳』、『論語』、『史記』、『孟子』などには、このような「言」の用例は見られない。

5 世紀『世説新語』は合計 36 門、1130 條あり、「德行第一」（46 條）及「言語第二」（108 條）に，「答曰」29 回、「謂～曰」・「謂曰」19 回、「對曰」13 回、「歎～曰」・「歎曰」8 回、「問曰」8 回、「語～曰」6 回見られ、また「進曰」3 回、「聞曰」2 回、「教曰」・「言曰」・「譏曰」・「戲曰」・「奉曰」・「言曰」・「謝曰」・「賦曰」など各 1 回、合計 96 回見られる。「曰」と比較すれば、『世説新語』全編に発言の引用を表す「言」は 1 回のみである。[36]

また、晉の干宝『搜神記』20 巻（『四庫提要』による）に、巻十六、十九にそれぞれ「答言」1 回[37]、巻十九に「呼言」1 回[38] しか見られない。特定の人物の発言の引用多くは「曰」を用いる。「語曰」12 回、「答曰」20 回、「答云」2 回、「問曰」13 回が出る。また、周生亞の『搜神記語言研究』によれば、「謂……曰」・「語……曰」・「問……曰」・「告……曰」・「語……云」など、65 回も出る。[39]

『搜神記』及び『世説新語』が漢訳仏典から影響を受けたかどうかはまだ検証する必要があるが、4、5 世紀における漢語本来の「曰」と漢訳仏典的な「言」との使用する頻度の差異は、このように一目瞭然である。

漢語本来の「曰」をわざわざ、漢訳仏典的な「言」に変えるということは考えられない。むしろ、本来「言」とあったものを余分なものと感じて削り、漢語らしい「曰」に変えた可能性が高い。この異同もまた、A が先に訳された本来のテキストで、B が後の修正の結果であるということを明示している。

(4)「賢者」の用法

A に「仏語賢者阿難」とあるところ、B では「仏語阿難」となっている。

漢語「賢者」は、才徳兼備の人の意味である。辞書には『論語』「子張」にみる「賢者識其大者，不賢者識其小者。」、『三国志』巻三八「蜀書・秦宓伝」にみる「漁父詠滄浪，賢者以耀章。」の例が引かれている。

他方、漢訳仏典で、比丘の名前の前にある「賢者」は、梵語 *āyuṣmat*, 俗語 *āyasmat*, *āvuso* の訳で、本来は「寿命を持つ」という原義から、インド古典では「これから長生きをする；健康な」という意味にも「年老いた」という意味にも使われるが、仏典では、もっぱら比丘の間での呼びかけに使われる。「～さん。同志～」にあたる表現である。また叙述文で、比丘の敬称して使われる。漢訳では「具寿」と直訳されたり、「尊者」・「賢者」などと訳された。例えば、竺法護訳『正法華経』（T. 9, no. 263）には「賢者知本際、賢者大迦葉」（63a8）、「賢者舍利弗」（73b4）など数多く出るが、いずれも梵本の *āyuṣmat* に対応している。従って、A の「仏語賢者阿難」は漢訳仏典として極めて自然な表現である。B はこの「賢者」を削ったと考えられる。

上の四点から、A が本来の竺法護訳経典で、B は A の簡略本であるということができよう。

おわりに

『大正新修大蔵経』に、長短二部の竺法護訳『鹿母経』がある。それぞれの内容は比較表で見たように、両者は概ね対応している。この二つのテキストの関係を明らかにするために、本論文では両者における「爾時」・「言」・「賢者」などの語彙について比較を行った。そして長篇『鹿母経』こそが本来の竺法護訳経典で、短篇はその簡略本であるという結論に至った。

『大正蔵』に『鹿母経』が二部ある理由としては二つの可能性が考えられる。

一つ目の可能性。ある類書の編者が、『鹿母経』を簡略化したテキストを作り、後にこの類書は散逸したが、その簡略本は残り、流通した。このテキストはおそらく『鹿子経』と名付けられていた。日本古写経の七寺本『鹿子経』の存在はこのことを証明している。六世紀初、宝唱は『経律異相』を編纂の際に、『鹿子経』と呼ばれたこの簡略本をさらに簡略にし、「鹿第七・鹿母落搔乞與子別還來就死一」を作り、「出『鹿子経』」と記した。一方、同じ頃、僧祐が、『出三蔵記集』を編纂した際、この簡略本を「支謙訳『鹿子経』」として記載した。後の経録の著者たちは、僧祐のこの記載を踏襲した。二百年後、智昇はこの誤りに気付き、その『開元釈教録』で、「竺法護訳『鹿母経』とは別に支謙訳『鹿子経』があるが、これは『鹿母経』と経文が同じである」として大蔵経からこの簡略本を除去した。

もう一つの可能性。竺法護訳『鹿母経』以前に、それとは全く異なる支謙訳『鹿子経』が確実に存在し、ある時代まで伝承されていた。しかし、テキストそのものは散逸し、経題のみが残った。その結果、後世の経録における記載が混乱するに至った。

筆者は、前者の可能性が高いと考えている。

注

*『大正新脩大蔵經』からの引用に際しては、CBETA（法鼓佛教學院 數位典藏組、http://cbetaonline.dila.edu.tw/zh/T0741_001）と SAT（大正新脩大蔵經テキストデータベース、http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php）のデータベースを利用し、『大正新脩大蔵経』（東京 1924-1934 年 : 大正一切経刊行会）の原文に当たって確認した。

（1） 出本充代 1995: 99-108 頁。

（2） 『中華大蔵經』24 巻 89-96 頁。

（3） 林屋 1945: 47 頁。

（4） 僧祐撰『出三蔵記集』（518 年）巻二 :「『鹿母經』一巻 …… 竺法護譯」（T. 55, no. 2145, 9a23）。
法経撰『衆経目録』（594 年）:「『鹿母經』一巻（晉世竺法護譯）」（T. 55, no. 2146, 116c11）。
費長房撰『歴代三宝紀』（597 年）:「西晉沙門竺法護　二百一十部（三百九十四卷經戒）……『鹿母經』一卷……」（T. 49, no. 2034, 64a15）。
［隋］彦琮撰『撰衆経目録』（602 年）:「『鹿母經』一卷　晉世竺法護譯。」（T. 55, no. 2147, 152b24）。
道宣撰『大唐内典録』（664 年）:「『鹿母經』（四紙），西晉竺法護譯。」（T. 55, no. 2149, 318a13-14）。
明佺等撰『大周刊定衆経目録』（695 年）:「『鹿母經』一卷（四紙）右西晉代竺法護譯。出『長房録』」（T.

55, no. 2153, 374c10)。

静泰撰『衆経目録』(665 年):「『鹿母經』一巻(四紙)晉世竺法護譯。」(T. 55, no. 2148, 184b13-14)。

円照撰『貞元新定釈教目録』(800 年):「『鹿母經』一巻 西晉三藏竺法護譯。」(937b28)

(5) 『漢語大詞典』第 7 巻, 433 頁。

(6) 同, 第 8 巻, 123 頁。

(7) "body hair", 辛嶋 1998: 533;李維琦 2004: 352 頁;俞理明 顧滿林 2013: 69。『漢語大詞典』には採られていない。

(8) 『漢語大詞典』には採られていない。

(9) 同, 第 2 巻, 1512 頁。

(10) これ以外に『不思議功徳諸仏所護念経』と伝康僧鎧訳『無量寿経』――経録・大蔵経では訳者が康僧鎧と記されているが、そのことがきわめて疑わしい――に見える。しかし、前者は訳者不詳。後者は 5 世紀の訳である。辛嶋静志『仏典語言及伝承』, 356 頁参照。

(11) 伝康僧鎧訳『無量寿経』にも出るが、これは 5 世紀の翻訳である。注 6 を見よ。

(12) 『漢語大詞典』第 12 巻 27 頁。

(13) "favour, grace", 辛嶋 1998: 112。

(14) 『漢語大詞典』第 7 巻 498 頁。

(15) 『出三蔵記集』:『鹿子經』一巻(『別録』所載, 『安錄』無 … 右三十六部, 四十八巻, 魏文帝時, 支謙以呉主孫權黄武初至孫亮建興中所譯出。)」(7a20-24)

『衆経目録』:「『鹿子經』一巻(呉建興年支謙譯)。」(T. 55, no. 2146, 116c12)

『大唐内典録』:「『鹿子經』一巻(『安錄』無, 祐云:見別録及竺道祖『呉録』。)(T. 55, no.2149, 228b12);「『鹿子經』(三紙), 呉建興年支謙譯。」(T. 55, no.2149, 291b15-17)

『大周刊定衆経目録』:「『鹿子經』一巻, 右呉建興年支謙譯, 出『長房録』。」(T. 55, no. 2153, 373c15)

(16) 「伝○○訳」とは、経録・大蔵経では訳者が○○と記されているが、そのことがきわめて疑わしいことを示す。

(17) 比較的新しい音写(例えば「阿修羅」「迦樓羅」など)を多用するなど明らかに支謙訳ではない。Legittimo(2010: 556)も、『出三蔵記集』がこの経に言及せず、『衆経目録』(594 年)と『歴代三宝紀』(597 年)から支謙訳として現れることから、支謙訳とすることを疑っている。なお、ドイツ語訳をした Höke 1984 は支謙訳と考えている。

(18) 伝康僧鎧訳『無量寿経』と伝支謙訳『撰集百縁経』にも見える。前者は 5 世紀の訳(注 6 参照)、後者は 6 世紀の訳と考えられている(出本 1995; 同 1998: 26 参照)。

(19) 『漢語大詞典』第 7 巻, 496 頁。

(20) 「然則現於涅槃者, 復是増發悲戀之心。」同, 第 7 巻, 575 頁。

(21) 同, 第 5 巻, 422 頁。

(22) 同, 第 3 巻, 1083 頁。

(23) 『出三蔵記集』:『鹿子經』一巻(『別録』所載, 『安錄』無 … 右三十六部, 四十八巻, 魏文帝時, 支謙以呉主孫權黄武初至孫亮建興中所譯出。)」(7a20-24)

(24) 「『出三蔵記集』にはその下注に舊録・別録・古録等の経録名が屢屢引用されている。…その中の舊録は竺道祖録を指し、別録は宋時衆経別録を指していたものと解している。」(林屋 1945: 42)。内藤(1967: 270)は、『衆経別録』を梁代初の成立と見ている。

なお、本論執筆に際して、経録の版本について方広錩先生にご教示を頂いた。方先生はイギリス・フランスの敦煌遺書残巻にある『衆経別録』をチェックし、『鹿子経』がないことを確認してくださった。しかし、方先生は「敦煌本は破損しているので、『衆経別録』が絶対に『鹿子経』を記載しなかっ

たとは断言できない。」ともいう。

(25) 「西晉沙門竺法護　二百一十部（三百九十四卷經戒）……『鹿母經』一卷……」(T. 49, no. 2034, 61c10-64a15)。「『鹿母經』一卷『鹿子經』一卷」(T. 49, no. 2034, 111b3)。

(26) 「費長房の訳者、訳時の査定は全くの独断であって、従来失譯経とされた経典の多くに、何等か尤もらしき典拠のようなものを附して、無理に訳者を附し、時代を附した傾向がある。」「つまり前代経録で一経とされたものが、同一名又は異名に依って三経にも四経にも分裁され、それに対して三人にも四人にもの訳者を配当している場合も珍しくない。」林屋 1945: 25。

(27) 「『鹿母經』一卷（又別有『鹿子經』一卷　與此全同　見僧祐録）」(T. 55, no. 2154, 494c18)；「『鹿子經』（與西晉竺法護所出『鹿母經』文同。）(T. 55, no. 2154, 494c13)；「『鹿母經』一卷　西晉三藏竺法護譯（又群錄中更有『鹿子經』一卷　云是呉代外國優婆塞支謙所譯　即與前『鹿母經』文句全同　但立名殊故不雙出）」(604b21-b23)；「『鹿母經』一卷（別有『鹿子經』一卷　與此全同）三紙」(688b9)；「『鹿子經』一卷，右一經。與『鹿母經』文同名異。據其文義合。從母立名。『長房錄』云：‘『鹿子經』，呉代優婆塞支謙譯’者，謬也。」(T. 55, no. 2154, 664b6-9)；「『鹿子經』一卷（與藏中『鹿母經』文句全同）。」(T. 55, no. 2154, 698b11)。

(28) 上記以外の経録の記載は次の通り。

まずは『鹿母経』に関する記述：

法経撰『衆経目録』(594 年)：「『鹿母經』一卷（晉世竺法護譯）『鹿子經』一卷　（呉建興年支謙譯）」(T. 55, no. 2146, 116c11-12)。

費長房撰『歴代三宝紀』(597 年)：「西晉沙門竺法護　二百一十部（三百九十四卷經戒）……『鹿母經』一卷……」(T. 49, no. 2034, 64a15)。「『鹿母經』一卷『鹿子經』一卷」(T. 49, no. 2034, 111b3)。

［隋］彦琮撰『撰衆経目録』(602 年)：「『鹿母經』一卷　晉世竺法護譯　『鹿子經』一卷　呉建興年支謙譯」(T. 55, no. 2147, 152b24)。

道宣撰『大唐内典録』(664 年)：「『鹿母經』（四紙），西晉竺法護譯。『鹿子經』（三紙）　呉建興年支謙譯」(T. 55, no. 2149, 318a13-14)。

明佺等撰『大周刊定衆経目録』(695 年)：「『鹿母經』一卷（四紙）右西晉代竺法護譯。出『長房録』」(T. 55, no. 2153, 374c10)。

静泰撰『衆経目録』(665 年)：「『鹿母經』一卷（四紙）晉世竺法護譯。『鹿子經』一卷（三紙）呉建興年支謙譯」(T. 55, no. 2148, 184b13-14)。

円照撰『貞元新定釈教目録』(800 年)：「『鹿母經』一卷（又別有『鹿子經』一卷　與此全同　見僧祐録）」(T. 55, no. 2157, 792a14)；「『鹿母經』一卷 西晉三藏竺法護譯（右群錄中更有『鹿子經』一卷。云是呉代外國優婆塞支謙所譯。即與前『鹿母經』文句全同。但立名殊。故不雙出）」(937b28-c2)；「『鹿母經』一卷（別有『鹿子經』一卷，與此全別）」(1035c10)。

次に『鹿子経』に関する記述：

法経『衆経目録』：「『鹿子經』一卷（呉建興年支謙譯）。」(T. 55, no. 2146, 116c12)

『大唐内典録』：「『鹿子經』一卷（『安錄』無，祐云：見別録及竺道祖『呉録』。）(T. 55, no.2149, 228b12)；「『鹿母經』（四紙），西晉竺法護譯；『鹿子經』（三紙），呉建興年支謙譯。」(T. 55, no.2149, 291b15-17)

『大周刊定衆経目録』：「『鹿子經』一卷，右呉建興年支謙譯，出『長房録』。」(T. 55, no. 2153, 373c15)

(29) 国際仏教学大学院大学附置日本古写経研究所所長落合俊典先生のご好意により、この 3 本の写真を頂いた。心から感謝の意を表したい。

(30) 七寺本『鹿子経』が一切経録外について落合先生に教えて頂いた。「智昇は経名・巻数・異名等を列記し、不入藏とした理由を八カ所に亘って述べている。……三、右『新道行経』を初めとする十九部四十二巻は、一経兩名（内容は同一であるが、書名が異なっているもの）とか正本を捜し得ないので、一経のみにしている。重複するものは載せない。」「金光明経四卷 鹿子経一卷 與藏中鹿母経文句全同」。落合 1994 第一巻 : 440 頁；444 頁。

(31) この例は方廣錩先生から教えて頂いた。

(32) 方氏の原文（2018 年 9 月）は以下の通りである：

『大正蔵』本『鹿母経』94 行，由於『大正蔵』本每行 17 字，與歷代大蔵経格式一様，故可以一行抵一行。唐寫経一紙 28 行, 亦即按照唐代寫経,『鹿母経』需要抄寫四紙。與唐代『衆経目録』、『道宣録』、『大周録』記載的的四紙完全相符。

諸記録紙數的経録，均記述『鹿母経』為四紙，唯有『開元録』著録為三紙。應該是用紙產地不同，規格不同。『鹿母経』中有不少偈頌。古代寫経，偈頌可以兩句為一行（5 言偈頌，10 個字一行；7 言偈頌，14 個字一行），也可以 4 句為一行（5 言偈頌，20 個字一行）。上面説『鹿母経』94 行，按照一紙 28 行抄寫，可以抄寫為 4 紙。但是其中有五言偈頌 40 行，所以，全経也可以抄寫為 74 行。那麼，按照每紙 28 行抄寫，就變成 3 紙了。所以，『開元録』著録的三紙也是有道理的。

『大正蔵』本『仏説鹿母経』227 行，按照每紙 28 行抄寫，需要 8.1 張紙。考慮到唐寫経首紙一般抄寫 26 行，則肯定需要 9 張紙。至今沒有一部経録有這種記載。

(33) 荻原雲來『梵和辞典』，28 頁。

(34) 引用を表す「曰」は、仏典以前の文献にも数多く見える。例えば、『史記』「項羽本紀第七」: 沛公、項羽相與謀曰：「今項梁軍破，士卒恐。」; 前漢の劉向撰『説苑』巻一＜君道＞：成王封伯禽爲魯公，召而告之曰：……; 同 : 魯哀公問於孔子曰：「吾聞君子不博，有之乎？」孔子對曰：「有之。」。

(35) ①説，説話。『説文』「言部」: “言，直言曰言。”;『左傳』「昭公二十八年」: “（賈大夫妻）三年不言不笑。” ②議論。『韓非子』「五蠹」:“今境內之民皆言治，藏商、管之法家者有之……。”另有③記載。『論語』「衛靈公」: “子貢問曰：‘有一言而可以終身行之者乎？’” ④言詞。『左傳』「文公七年」: “今君雖終，言猶在耳。” ⑤告訴。『史記』「陸賈酈生列傳」: “酈生瞋目案劍叱使者曰：‘走！復入言沛公，吾高陽酒徒也，非孺人也。’” ⑥解釋引文，詞語，相當於“就是説”。『孟子』「告子上」: “『詩』云：‘既醉以酒，既飽以德。’言飽乎仁義也。”（『漢語大詞典』第 11 巻，1 頁）

(36) 『世説新語』「任誕第廿三」第 52 條：王佛大歎言：“三日不飲酒，覺形神不復相親。”

(37) 『搜神記』巻十六：如是再三，定伯復言：“我新鬼，不知有何所畏忌？”鬼答言：“惟不喜人唾。”於是共行。

同，巻十九 :（丹陽道士謝非）非驚擾不得眠。遂起，呼銅問之 :“先來者誰？”答言 :「是水邊穴中白鼉。」

(38) 同，巻十九：穀城鄉平常生，不如何所人也。數死而復生。時人為不然。後大水出，所害非一，而平輒在缺門山上大呼言：“平常生在此。”云：“復雨，水五日必止。”止則上山求祠之。但見平衣杖革帶。後數十年，復為華陰市門卒。

(39) 周生亞 2007: 169 頁。

【附記】本論文を執筆するにあたり、落合俊典先生、辛嶋静志先生、方廣錩先生から貴重なご指導、ご意見を頂いた。心から感謝の意を表したい。

引用文献・略語

出本充代

1995 「『撰集百縁経』の訳出年代について」,『パーリ学仏教文化学』第 8 号 , 99-108 頁.

1998 『*Avadānaśataka* 梵漢比較研究』, 京都大学博士論文（未出版）.

林屋友次郎

1945 『異譯經類の研究』, 東京：東洋文庫.

Höke, Holger

1984 "Das P'u-sa pen-yüan ching（Frühere Leben des Bodhisattva. Eine Sammlung buddhistischer Geschichten," in: *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung*, 7, pp. 113-213.

辛嶋靜志

1998 *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra*『正法華経詞典』, 東京：The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University, *Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica* I.

2016 『佛典語言及傳承』, 上海 : 中西書局.

Legittimo, Elsa

2010 "Der Garuḍa und die Nāgas: von Feindschaft zur Freundschaft unter buddhistischem Einfluss", in: *From Turfan to Ajanta: Festschrift for Dieter Schlingloff on the Occasion of his Eightieth Birthday*, ed. Eli Franco and Monica Zin, Lumbini 2010: Lumbini International Research Institute, vol. 1, pp. 547-566.

李維琦

2004 『佛經詞語匯釈』, 長沙 : 湖南師範大學出版社.

内藤龍雄

1967 「敦煌残欠本『衆経別録』について」『印度學佛教學研究』30（1967.3), pp. 268-270

Nattier, Jan

2008 *A Guide to the Earliest Chinese Buddhist Translations: Texts from the Eastern Han* 東漢 *and Three Kingdoms* 三國 *Periods*, Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, *Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica* X.

荻原雲来

1979 『漢訳対照梵和大辞典』, 東京 : 1940-74: 鈴木学術財団 ; 東京 1979, 1986, 増補改訂版 : 講談社.

落合俊典

1994 『七寺古逸經典研究叢書 第一卷』, 東京 : 大東出版社.

俞理明 顧滿林

2013 『東漢佛道文獻詞彙新質研究』, 北京 : 商務印書館.

周生亞

2007 『搜神記語言研究』, 北京 : 中國人民大學出版社.

v.l. = *varia lectio*（写本あるいは版本の）異読

（v） = *verse* 偈頌